

黒魔女 2 つき。

Hide and Seek

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宮 祐樹さんに書けって言われました。嘘です。

黒魔女につき。というオリジナル作品の二次小説です。

黒魔女はお茶会がしたかった。

目

次

黒魔女はお茶会がしたかった。

ミーシャ・エリザベートの朝は遅い。

よだれで枕に湖を作るその腑抜けた顔には、黒魔女の威厳などといったものはまるで見受けられない。小さく軒をかきながら、彼女は寝返りを打つ。

「……………んがっ。……………んー?」

一際大きく軒をかいたかと思えば、その拍子に目を覚ました。ぼんやりした目に映るのは、なんだか柔らかかそうな白いもの。

目を擦り、そのままよだれを袖で拭う。はつきりとしてきた目であたりを見回すと、そこはいつも通りの部屋だった。そして、ベッドの脇には、優しく微笑む一人の女性が。

「おはよう、ミーシャちゃん」

「おはよう……………。ってなんで居るのよ!」

白い衣装に身を包んだ彼女、アイリス・ミルフィーユは優雅にほほ笑む。彼女こそは、ミーシャが敵視をしてやまない白魔女であり、ミーシャの事をよく知る数少ない人物である。

「なんでだと思っう?」

「え?」

アイリスは笑みを崩さずにそう言う。しかし、ミーシャはその口調に違和感を感じた。例えるなら、いつもよりも一度だけ温度が低いような、その声に。直感的に気付く。アイリスは怒っていた。なんで? 今日は何の日だっけ? ミーシャの脳裏を様々な記憶が、まるで走馬灯のように駆け巡る。アイリスの薄目から除く緑の瞳が、ミーシャに命の危機を感じさせる。

「……………あ」

そして、不意に思い出した。間の抜けた声を漏らし、呆然とする。そう、今日はお茶会の日だった。しかも、私からアイリスを誘った。

「思い出した?」

「……………あはは」

笑つてごまかす。無理だ。許してはくれなさそうだ。

「ご、ごめん！ 今から準備するからー!!」

杖を取り出し、急いで振るう。帽子を頭に、ローブを浮かせて引つ掴んで扉へ……。

「ぶべっ」

扉に突っ込むミーシャ。杖を振るい、扉を開けることすら忘れ、彼女は顔をしかたま打ち付ける。

「ふぎゆう……」

「あらあら」

目を回すミーシャが最後に見たのは、いつも通りに笑うさかさまのアイリスだった。



「え？ 怒ってないわよ？」

「えー？ 絶対怒ってたって」

擦りむいた鼻の頭を魔法で治療してもらいながら、ミーシャは膨れる。

「でも、お茶会の約束を忘れてたのは、ちよつと悲しかったなー」

「う……。忘れてなかったもん。ちよつと寝坊しちやっただけで……」

この日のために用意してあった、とっておきの紅茶を指さす。

まだ箱からすら出されていないそれは、確かに、今日のために用意されたのだろう。

「でも、ケーキはないのよね？」

「それは……。うん……」

お茶と違って日持ちのしないケーキは、早起きして買ってくるつもりだった。だけど、昨日はいつになく研究がノっていたから、気が付いた時にはもう朝も近くて、とてもじゃないが満足に眠る時間は無かったのだった。

「あら、じゃあ、お風呂にも入ってないんじゃないの？ 通りで髪もぼ

さぼさ」

「むー。ほつといてよー!」

「ほつとけないわよ。ミーシャちゃんの髪、とつても綺麗なんだから。あつ、そうだ、今から一緒にお風呂入りましようか?」

唐突に思いついたようにアイリスは言う。

「なんであんたと入らなきゃならないのよ」

「だって、私だけ待たされてばかりだし。それに、ミーシャちゃんの髪、ちゃんと洗ってあげたらもつときれいになると思うんだけど。ね、一回私に洗われてみない?」

「やー!」

抵抗も虚しくお風呂場へと引きずられていくミーシャ。

「まあまあ、お茶会を台無しにしたお詫びだと思つてー」

「なんでそれが詫びになるのよー!」

屋敷の中に、叫び声は響く。

アイリス以外、誰も聞いていない声だ。



「ていうか、あんたいつから部屋にいたのよ?」

キユーテイクルを艶やかに光らせながら。ミーシャは問う。丸洗いされて、すっかり大人しくなった彼女は、アイリスの手土産のケーキをがつつと食べている。

それは、以前ミーシャが早起きして買ってきたケーキと同じものだ。

「うふふ。なんだか楽しみで、早くに目が覚めちゃったのよね」

その足でケーキを買い、そしてそのままここに着いたとしても、そう遅くはないはずだ。

「ミーシャちゃんの寝顔がかわいくて、気が付いたらずっと眺めてたの」

「……起こしてよー!」

「ふふつ。ごめんね。でも、あんまり気持ちよさそうだったから、起こ

すに起こせなかったの」

にここにこと朗らかに笑いながら、アイリスはミーシヤを見つめる。

「あ、もう一個ケーキ食べていい？」

「ええ、いいわよ」

まるで小動物を愛でる様なその瞳は、いつまでも優しく緑に輝いていた。